

建築設計製図Ⅲ

第1課題
まちのライブラリー

3年1組

担当：
若色 峰郎
関澤 勝一
飯田 善彦
高橋 晶子
西沢 立衛
野沢 正光
吉田 博

石井 美也子

現状において、人々は敷地周辺の道路脇や駐車場などで談話や散歩、遊びなどを楽しんでいた。そんな人々の生活の一部となるような図書館を目指した。

そこで、敷地の地上を開放し、図書館機能を地下に配置した。ここでは、図書館の大部分の機能を地下に埋め込みながらも地下であることを感じさせない空間、地下であるからこそのおもしろさ、また、地上にいないながらも地下の存在を感じさせ、誘い込むような演出といったことに挑戦した。

指導＝野沢 正光

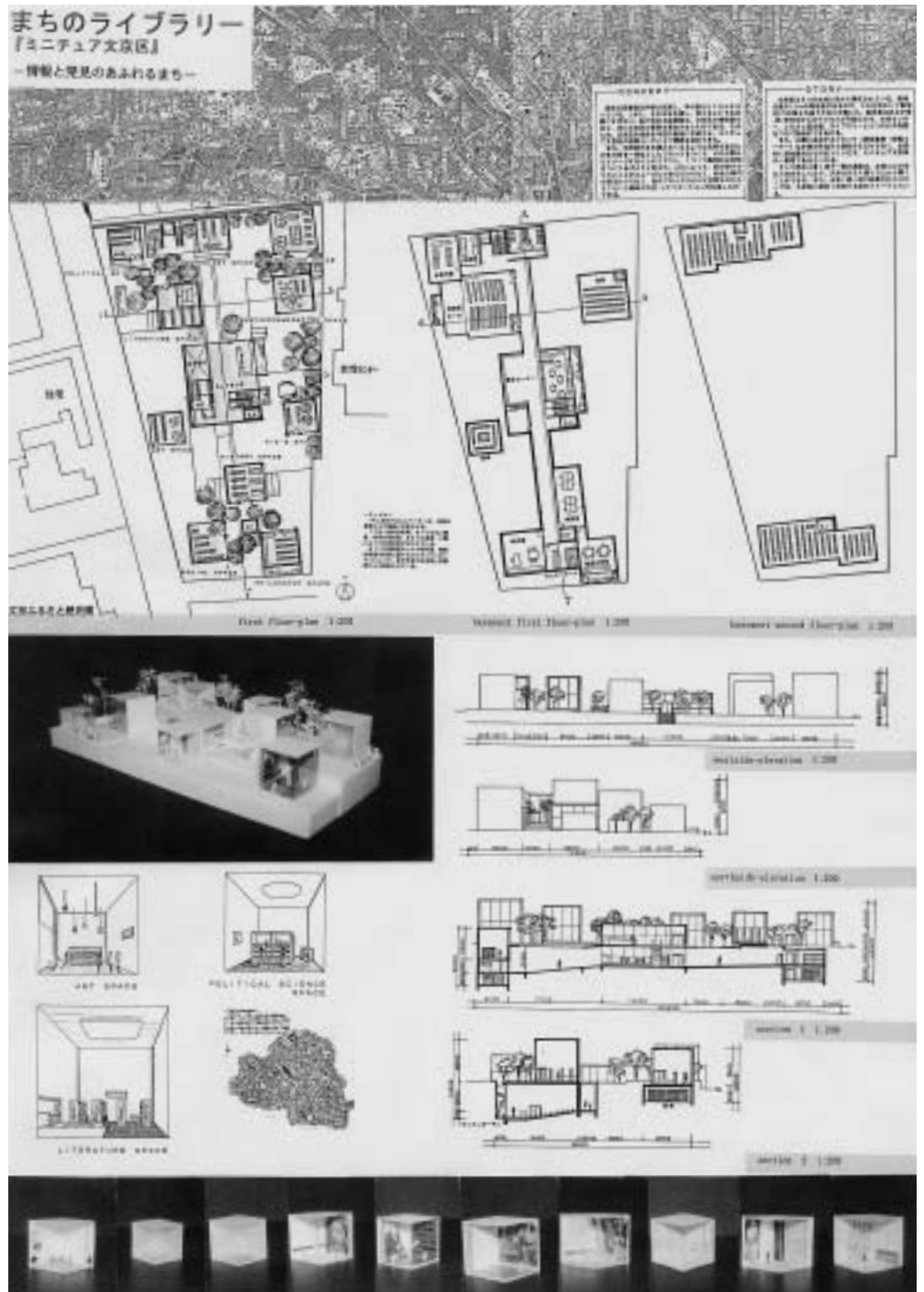
文京区立真砂図書館の敷地を借りての「まちのライブラリー」

課題も回を重ねている。近接してふるさと歴史館等の親しみやすい公共施設や、歴史を物語る木造の比較のおおきな住宅があったり、なによりも二年生の課題が隣接の敷地を想定していることなどが、ここでの計画が長続きしている理由だろう。

建築がそうした周辺の状況を根拠のひとつとし、ていねいに問題を探し、解いていくものであることを知ってもらうのに、この課題の設定は適したものであるようで、今回も佳作が多くあった。

石井さんの提案もそうしていた。石井さんの読み解きが独自の建築環境につながったものといえると思う。図書館の大部分は地下にある。

中国のヤオトンのように穿たれた中庭によって、そこは地上に在ると似て明るくひかりに満ち、落ち着いた場を作っている。図書館の様々な機能も中庭を上手に介すことにより適当な距離を保ち、快適そうに見える。開放された地表の計画も、地下への入り口、四阿、とともに「ふるさと歴史館」の機能を補完する郷土図書館を独立させこじんまりと置いたり、東側の余地に大きな樹木を配しとなりの建物との調整を図るなど、好ましい。地下からそびえる樹木、地下の覗き込めるカフェテラス、それへの階段など、地上部分と地下部分の応答を意識した計画となっているところへの評価が高かった。



松井 理恵

松井 理恵

私が今回のライブラリーに求めたことは、文京区の情報源であり、また文京区の要素を集合させた場所であってほしいということである。そのため、文京区の地形を今回の敷地に反映させ、「ミニチュア文京区の提案」という形で課題を進めてきた。また、利用者が「本を読みたくなるような空間」をつくりあげ

るため、本分野ごとに立方体のブロックをつくり、分野ごとにイメージする、各々の個性的な空間を表現しようと考えた。

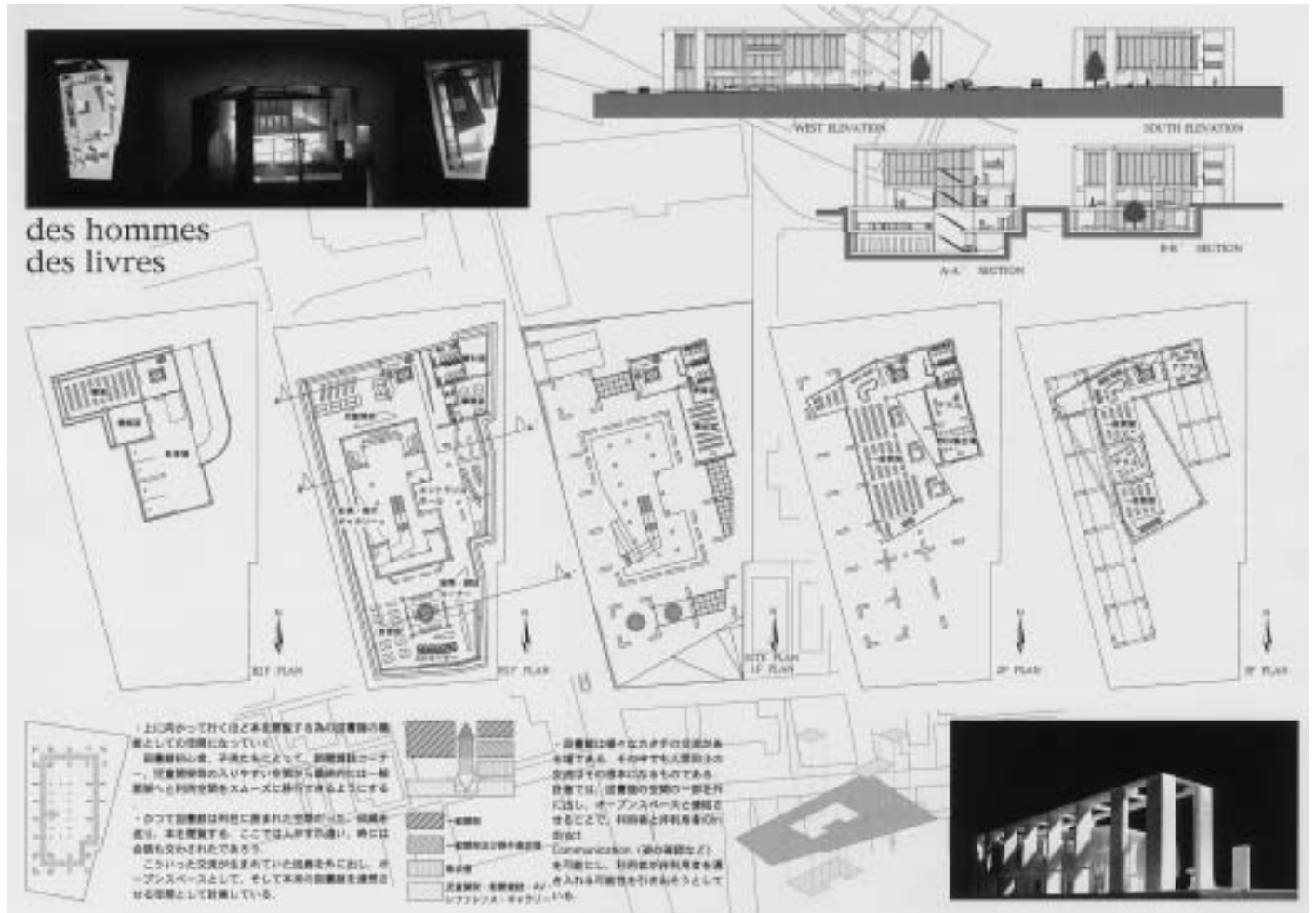
指導＝飯田 善彦

この計画案は、敷地全体を公園として地域に開放するという前提のもとに、ライブラリーを小さな単位に分割し、地中で互いを連結しつつ分散的に配置するという案である。

分割の根拠、個々の単位が持つスケールの決め方、またそれぞれを結びつけるネットワークの妥当性等々を含めて、ライブラリーという建築を組み立てる論いどのような施設であるべきかといった本質的な問いかけは不

充分であり、一切を文京区の地形の援用というランドスケープ的な物語の中に説明しようとする強引さと無邪気さは否めないが、結果として得られた風景には、路地奥に位置する敷地条件に妙に適合した魅力を認めることができる。

今のところ、建築を構想していくモチベーションの大部分を、個人的な感情に依存しているため、プレゼンテーションを含めて自信のなさが目についてしまうが、これからは思いついたアイデアを建築という全体性が高めるために、計画的な、あるいは社会性を持った言語を組み込むなど、よりリアリティを獲得するための自分なりの方法を模索して欲しいと思う。



建築設計製図Ⅲ

第1 課題
まちのライブラリー

3年2組

担当：
高宮 真介
本杉 省三
アストリッド クライン
奥田 孝次
椎名 英三
曾我部 昌史
横河 健
36

立川 博之
情報媒体としては一切の無駄が

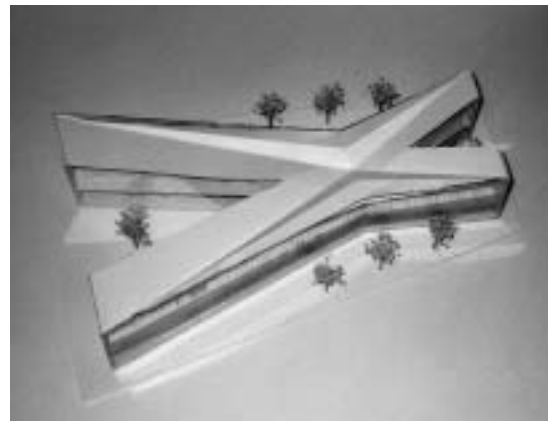
ないデジタル。逆に本には手アカ、汚れ、破損など、情報伝達においては不必要なものが蓄積される。しかし本を扱う現在の図書館では、それらを見て、触れて、他人のことを思い浮かべたり自身のことを懐かしんだり、自分の感情を見出せない人が増えつつある中、そこは人が感情を露呈できる場でもあるのではないか。それこそが本来の図書館であり、その意義を自分なりに再確認するため、カタチにしてみた。

指導＝奥田 孝次

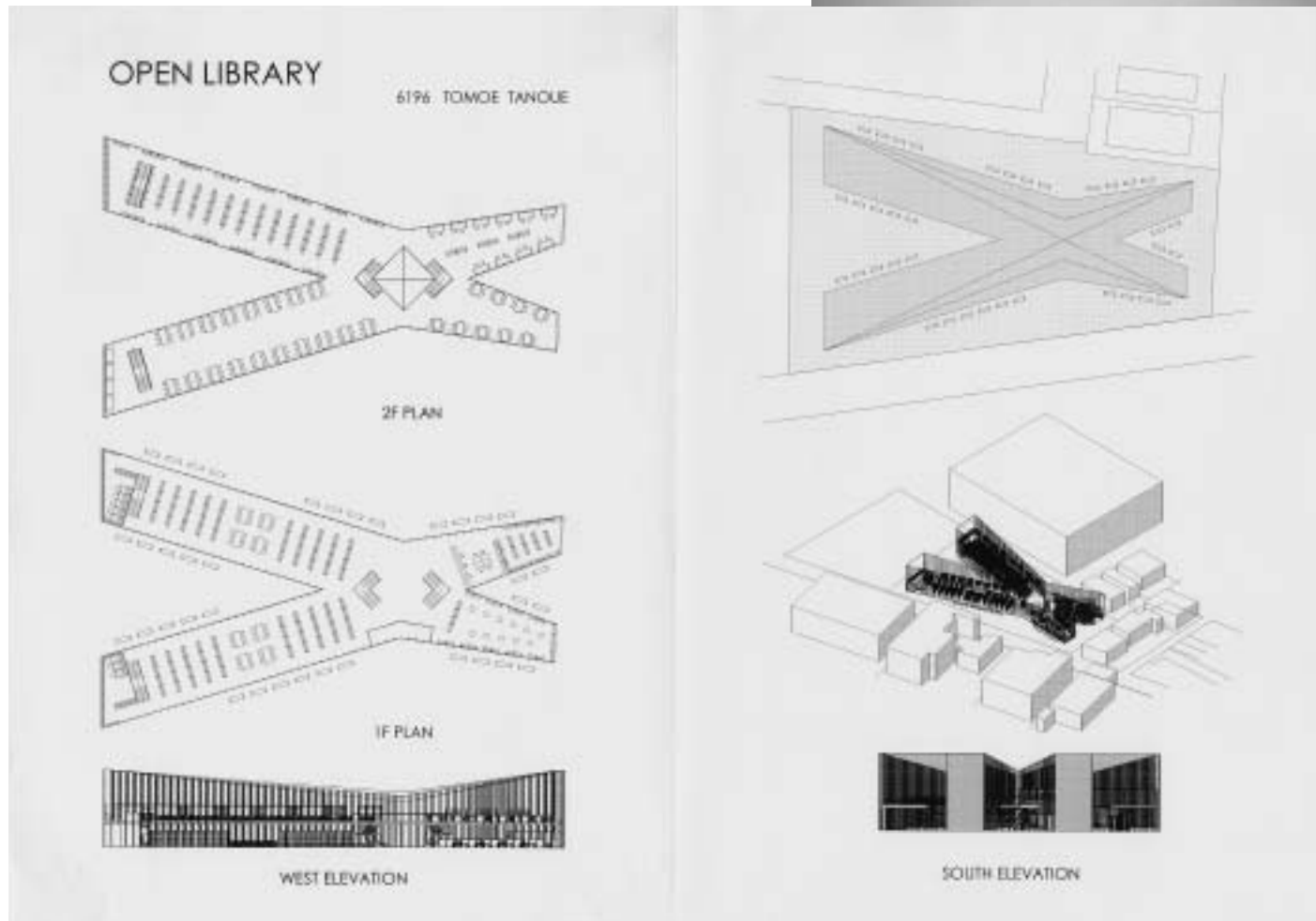
今後、情報化社会における“情報”とは何かという議論から学生達と始めた。本課題の“まちのライブラリー”というオープ

ンな地域的位置づけも考慮して、一体“本”とは何かとの疑問を問いかけてみた。敷地周辺の地域コンテキストに関して歴史、地形、周辺環境、人の動線等を注意深く解析すると、多くの固有性豊かな特性が発見できる。この立川君の作品は、従来の図書館のような単に“本を開く場”だけではなく、地域的交流の場として、“人の交流による情報を創出する”という観点からコンセプト化されている。平面上二つのグリッドが幾何学的に導入され、主要グリッドにおいて開架書庫等の一般的な機能スペースが配置され、また西側道路を配慮したオープンスペースを構成するグリッドはこの建物の顔として整合してい

る。人の流れと交流により、“ものや情報”がシークエンスに演出され、人の回遊性が楽しめる空間でもある。住宅地区に隣接し、まちの歴史を感じさせるオープンスペースの“まちの交流の場”、西側木造住宅へのスケールに対して透明性のあるファサードの顔づくり、南側と路地との結節点における導入アプローチは、この地域特性から注意深く読みとっている。最終的に人にコンセプトを伝える、ビジュアル的に表現することは構想立てする以上に必須である。全体的にインパクトのあるプレゼンボードに表現され、最後の“みせる手法”において鮮明にコンセプトが“みえた”という点を特に高く評価した。



田ノ上 智絵



ス、カウンター、事務室、書庫、トイレを、2Fには一般書架、CD・ビデオスペース、閲覧スペースを設けた。情報源を分野別に配置し、フロア間での自由な行き来を可能にすることにより、従来の閉鎖的なイメージをなくすことに心がけて設計した。また、館外に中庭を設け、その空間を緑化することによって、より親しみやすく安らぎを得られる場を提供する。

的かつ慎重に計画されている。道路に面するメインエントランス側の広い角度はちょうど人が両手を広げて友人を歓迎する仕様に似ているし、角度の小さい側も中庭をそっと挟み込んで心地よい雰囲気を作っている。クロスした部分は自然と中心的機能となり、それぞれのウイングへの移動や共用施設のために計画されて、様々な図書館機能へスムーズに接続される。上から見渡してもシャープなレイアウトとは対照的な、ソフトで明るい印象を全体から感じるのには、それぞれのボリュームを巧みに編み込んだ屋根のような部分の持つ繊細さが、構成の潔さと合わさって魔法的な効果を生んでいるからかもしれない。

田ノ上 智絵

図書館は情報を得る場であり、憩いの場でもある。情報源は何も本そのものに限らず、様々な分野に渡っている。1Fには一般書架、子供スペー

指導=アストリッド クライン
田ノ上さんの提案はハサミ型のシンプルでとても大胆な形態。一見アグレッシブでダイナミックなプランに感じるのだけれど、交差する角度や配置が印象